

概要

- 北海道新ひだか町は新規参加者が多く、振興作物のミニトマトやピーマンは収量性に個人差があり、**収量安定化、経営管理能力向上が課題**であった。
- 普及センターは、関係機関と連携し、町の縮図的な地域を重点対象地域に選定し、土壌や作物栄養診断結果に基づく**施肥管理、ハウス内の透排水性の改善、経営管理能力の向上**に取り組んだ。
- 農業者は、緑肥導入等による透排水性の改善と施肥改善で**収量が向上**した。また、所得解析ツールの活用で**生産コストの低減、経営改善**が図られた。

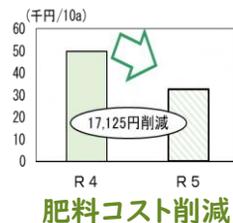
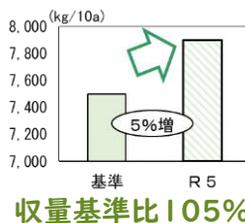
具体的な成果

1. 施肥改善の実施

■ 土壌・栄養診断結果に基づく施肥管理を2戸が実施し、**減肥や収量性の向上、コスト削減**となった。



農業者と診断結果と生育状況を確認



2. 透排水性の改善

■ ハウス無被覆の越冬緑肥栽培の**導入戸数増加** ■ 各種排水対策の実施で、生育が改善し**収量向上**

(R4→R5)
① 緑肥導入
6戸 → 9戸



(R4→R5)
② 透排水性改善
9戸 → 10戸



排水対策の実施



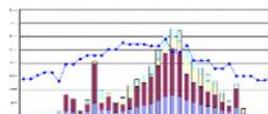
部会平均反収対比
106%を達成

3. 担い手の経営管理能力の向上

- 肥料費低減や施肥省力化の検討者が増加
- 所得解析ツール活用は6戸から9戸に増加
- 個別経営相談では、各自の課題を見える化



省力化を見据えたロング肥料の活用



労働時間超過の時期は、ミニトマト主枝の切り替え等、労働分散を検討！



数値の比較と経験談等は、新規就農者の経営の参考となった

普及指導員の活動

令和3年
～令和5年

- 令和3年から**越冬緑肥栽培の導入を提案**し定着を図った。令和5年は、緑肥を経年導入している農業者に対して、土壌診断結果に基づく**施肥設計を提案**。また、栽培期間中も**土壌・栄養診断に基づく追肥を提案**。
- 各診断結果と生育状態を農業者と確認して、**追肥技術の習得に向けて支援**。
- 融雪水や雨水のハウス内への流入を防止するための「**矢板**」導入を提案、試験研究機関と連携し無材暗きょ施工による**排水性の改善効果を現地研修会にて実証**。
- 「矢板」の導入事例は、地域全体の生産部会の**研修会を対象地域で開催して、事例や効果を報告**。
- 所得解析ツールによる各農業者の**肥料費や農薬費を比較した資料を提示**。
- 生産費を農業者間で比較して、技術的な課題が整理できるように、夏と冬に**研修会を開催し、課題を明確化した**。

普及指導員だからできたこと

- 農業者の栽培は場に応じた**地域密着型の活動**で、透排水性改善対策を提案した。また、**農業試験場と連携**して現地研修会を通じて効果を確認した。
- 所得解析ツールを用いて対象農業者9戸と合意し、生産費を比較して、**技術的な課題と結びつけて提案**した。

北海道

環境と経営の見直しによる地域振興作物の安定生産

活動期間：令和3年度～（継続中）

1. 取組の背景

- (1) 北海道新ひだか町は新規参入者が多く、地域の振興作物であるミニトマトやピーマンは収量性に個人差があり、収量安定化、経営管理能力向上が課題であった。
- (2) 普及センターは、関係機関と連携して、町の縮図的な地域を重点対象地域に選定した。収量安定化では、ハウス内の透排水性の改善と土壌や作物栄養診断結果に基づく施肥管理に取り組んだ。
- (3) 新規参入者や若手農業者からは、品目別の所得を知り、経営状態をより詳しく把握したいとの要望があり、所得解析ツールを活用した経営管理能力の向上に取り組んだ。

2. 活動内容（詳細）

(1) 環境改善による作物の安定生産

- ・ 緑肥を活用した土壌化学性の改善（写真1）
- ・ 農業者別の排水対策による透排水性の改善（写真2）



写真1 緑肥の効果確認

- 雨水流入対策（矢板の設置）
- 暗きよ整備・改修
- 高畝栽培&ポンプ排水
- 無材暗きよ施工（カットドレーンmini）

各種排水対策の提案



写真2 無材暗きよ施工（カットドレーン mini）の実演

(2) 担い手の経営管理能力の向上

- ・ 所得解析ツールを活用した経営課題の明確化（写真3）



写真3 冬季の懇談会・個別経営相談

- 懇談会：コスト低減事例紹介や主要品目の所得寄与度の確認
- 懇談会：経営転換の考え方や、今後の経営方針についての情報交換
- 個別経営診断：所得解析ツールを活用し、個別の経営課題の確認

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 施肥改善の実施

- 土壌診断や栄養診断結果に基づく施肥管理を2戸が実施し、減肥や収量性の向上、コスト低減となった（写真4、図1、2、3）。
- 1戸の農業者は土壌診断・栄養診断結果に基づいた施肥管理を行い、北海道施肥ガイドの基準より追肥量を抑えながらも、草勢および収量を確保した。
- 1戸の農業者は土壌診断で下層土まで養分過剰であったため、基肥および追肥を削減した結果、肥料コストが減少し、養分蓄積が緩和した。
- 夏季現地研修会を農業者2戸の施肥改善の展示ほど開催したことで、取組内容が地域で共有され、トマト・ミニトマトほ場の減肥の可能性について意見交換がなされた。



写真4 農業者と診断結果と生育状況を確認

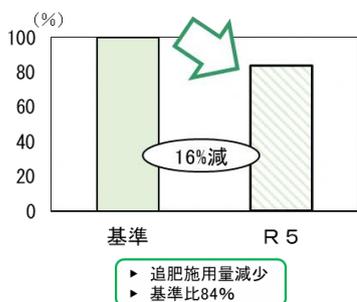


図1 施肥改善

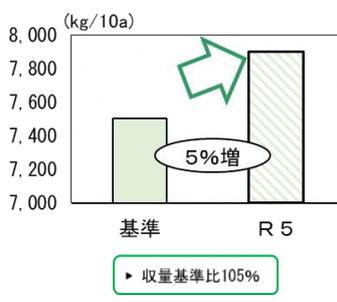


図2 収量性

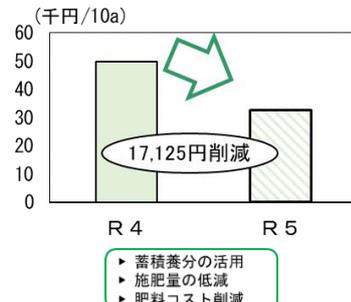


図3 肥料コスト

(2) 透排水性の改善

- 緑肥導入は、通年作物を栽培しており導入が難しい農業者1戸を除く10戸（越冬8戸、通常2戸）で実践された。現地研修会や個別対応を通じて、越冬以外の栽培方法の情報共有をしてきたことから、花き栽培農業者2戸が緑肥導入を開始した。
- 入り口が道路より低いハウスに「矢板」を設置した農業者は、春先の融雪水や雨水の流入が防止された（写真6）。また、地区の生産部会の青空教室を重点地区で開催したことで「矢板」の情報共有が進んだ。
- また、暗きよの改修と施工も実施したことで、春のハウス準備や定植作業がスムーズとなった。その結果、ピーマンの生育も良好となり、取組農業者の収量は部会平均反収に対し106%を達成した（写真6）。



写真5 融雪水や雨水の流入防止(矢板)



写真6 ピーマン部会平均反収の106%を達成

(3) 担い手の経営管理能力の向上

- ・夏季の現地研修会にて個別の経費（肥料費、農薬費）の比較資料を示したことで、価格の安い肥料の選択や省力化を見据えたロング肥料の活用など、肥料費に対する改善方針を立てた（写真7）。
- ・冬季懇談会では、これまでの営農における栽培品目や経営転換の経験談が話題となり、新規就農者にとって作型や品目の選択の参考となる場となった（写真8）。
- ・「所得解析ツール」は、データの配布、懇談会や個別相談時を含めて9戸で活用された（図4）。



写真7 肥料費低減や施肥省力化の検討者



写真8 経営を考える場となった懇談会

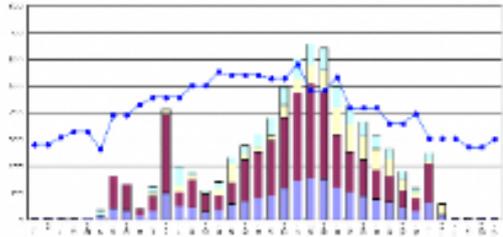


図4 月別労働時間の状況

4. 農家等からの評価・コメント（重点地区複数農業者）

- ・土壌診断・栄養診断結果が養分過剰であったため、追肥量を減肥した。その結果、トマトは順調に生育したため、後作のきゅうりでも検討したい。
- ・3年間、続けてきた越冬緑肥は、現地研修会で活用し、根張りを目視して、導入効果を確認でき、土づくりの必要性を改めて再認識した。
- ・普及センター提案の「矢板」を用いた雨水流入防止対策は、作業性が改善され、重点地域以外の農業者でも取り組むきっかけとなった。
- ・夏季の現地研修会では、個別の経費（肥料費、農薬費）を比較した資料を見て、他の人のやり方に興味を持った。次作では価格の安い肥料の選択や省力化を見据えてロング肥料を活用したい。
- ・冬季懇談会では、これまでの営農における栽培品目や経営転換の経験談が話題となり、新規就農者にとって作型や品目の選択の参考となる場になり有意義な懇談会であった。

5. 普及指導員のコメント

（日高農業改良普及センター・地域第一係）

- ・地域は、新規就農者が多いことから、収量の安定化と経営管理能力の向上が重要であった。収量の安定化では、各診断結果に基づく施肥管理の実践と地域密着型活動で農業者別の透排水性改善を提案して普及を図った。
- ・特に活動では、役場やJA、研究機関と綿密に検討して活動した。
- ・また、農業者の要望に対して肥料費や農薬費を可視化して比較できるようにすることで、施肥管理や病害虫防除に関する技術的な課題整理が明確化し経営改善を図るきっかけとなった。

6. 現状・今後の展開等

(1) 環境改善による作物の安定生産

- ・暑熱対策や透排水性改善対策の効果確認及び実践に向けた支援

(2) 担い手の経営管理能力の向上

- ・個別の経営相談に基づく経営課題の整理と改善対策の提案
- ・新規作物（ピーマン）およびミニトマトの新規作型（半促成長期どり）の導入支援